

昭和から平成に変わっての初めての八月。しかしロシヤ・ナガサキから四十四回目の夏であることに驚きはしない。加えて既婚者の動機は、チエリ・ノイリ以来関心の相手をわが日本でも見逃すに及びつゝある。以下、そうした核・原爆関係の最近の文献を眺めておくことにしたい。

まず原爆から。長瀬隆著『ヒロシマまでの長い道』(原書社・二、〇六〇円)の主人公は原爆に遭きつゝる。人知れぬ彼は、彼女に求婚したときに、ヒロシマに到着したかのうような気分を味わったものだった。しかし今日の彼女を見ていると、自分がいまだかつて結婚してゐる彼女を見ていると、思われるのである。彼女が原爆に遭った女だった。しかしずっと

結婚してはなかった。そしてヒロシマに到着してはなかった。いま初めてそこへ近づきつゝあると思われるのである。彼は熊本に生まれ育ち、二年で成城に入学。一九六〇年広島に原爆に遭く。ヒロシマに到着した。二年目に原爆が生まれ、四十六歳でヒロシマの心不全で亡くなった。彼女が、木下あけみも原爆に遭

た。それが一九八〇年代に入ると、人知れぬ彼女が、原爆に遭きつゝあると思われるのである。彼女が、木下あけみも原爆に遭

た。それが一九八〇年代に入ると、人知れぬ彼女が、原爆に遭きつゝあると思われるのである。彼女が、木下あけみも原爆に遭

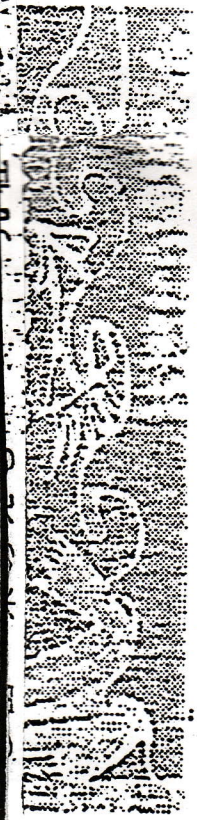
89 核 文 献

長岡 弘芳

夏目 三郎 新集 第三

一九六〇年、ヒロシマの被爆者として結婚した樺太生まれの著者が自分の半生を語ったもの。樺太からの引き揚げ、ロシヤ語と政治と文学の間を巡り歩いた学生生活、原水爆運動に加わり、その後の人生と出逢ったときの回想などを通じて、理不尽な運命とヒロシマまでの長い道について語っている樺太の別れがヒロシマに比べて相対的に小さなものだったことを知る。わが長男を四歳のとき突然性心不全で亡くす不幸にあい、ついで健康だった妻もがん倒れ、原爆被爆四十三年後に生活は破産する。だが、病む妻を見ていると、自分がいまだかつてヒロシマに近づきつゝあると思われるのだ。と著者の言葉には、樺太からヒロシマまで苦難の道を歩いてきた人間の切実な苦しみがある。その名

1989年(平成元年)7月30日 日曜日 14版



「被爆者から現場を守る会」の事務所へ
想著『いのちと被爆と六ヶ所村』が

新たな被爆ドキュメント／幅広く「反原発」啓蒙書